天理教 江南支部だより

発行先　江南支部
発行日　立教188年２月1日
発行責任者　福西　努
発行住所　甲賀町上野461番地9

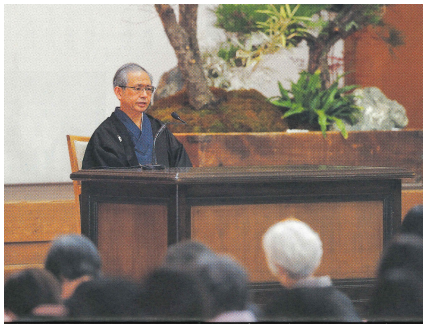
２月号　NO295

真柱様 年頭あいさつ

明けましておめでとうございます。旧年中はいろいろとおつとめくださって、ご苦労さまでした。

いよいよ年祭活動の最後の年になったのであります。二年余り前、立教一八五年の秋に諭達を出しまして、そして、その次の年から、三年千日仕切っての年祭活動の期間に入ったのであります。それから、はや二年が経ったわけであります。

論達は、全教が心をそろえて年祭に向かって歩むために出したものであります。みんな一手一つとなって、たすけ一条に遭進する姿をもって教祖にご安心いただき、お喜びいただきたいという気持ちであったのであります。



一手一つというのは、一つの目的に向かって、それぞれが自分の与えられた立場の務めをしっかり果たすことによってご守護いただける姿と言うことができるかと思います。本当に一手一つになれば、自分一人では出ない力を与えていただくことができるでしょう。また、自分一人では味わうことのできない喜びを味わわせていただくことができると思うのであります。その一手一つになるためには、まず一人ひとりが教祖の思召に心を合わせることであります。すなわち、神一条になることであります。

神は心に乗りて働く。心さえしっかりすれば、神が自由自在に心に乗りて働く程に。

（明治31・10・2）

と、お言葉にあります。神一条の心に立脚して、自分に与わった立場の役割、また、いまやらなければならないことに一生懸命に取り組むことだと思います。

秋の大祭のときにお話ししましたように、現在の私たちの年祭活動に対する取り組み方は、全体として、まだまだ教祖の思召との間に大きな開きがあると思わざるを得ないのであります。しかし、その開きは、私たちの心の持ち方、それに基づいたつとめ方によっては、縮めることができると思っているのであります。

三年千日の三年目、締めくくりの年であります。一年しかないとも言えるし、まだ三分の一あるという取り方もできます。思召に少しでもお応えできるように、心定めの達成にしても、それぞれの目標にしても、それに一生懸命に取り組むことによって、頑張ってつとめて、この一年を実りのある年にしていただきたいと、そのようにおつとめいただきたいと願ってやみません。

年の初めにあたって、思うところを述べて、ひと言ごあいさつにさせていただきます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

朝の信仰読本

対応一つでおたすけはできる

中山慶純著

ある研究によると、世間で成功している人の多くには共通点があるそうです。それは「人の嫌がること、人の心を傷つけることを言わない」ということ。どうしても言わねばならないときは、傷ついた心を〝手当て〟する言葉を用意しておく。これが、成功するための秘訣の一つといいます。

私たちお道の者も、おたすけの際に、相手にとって耳の痛いことや厳しいことを言わねばならないときがあります。

ここで失敗する人が結構いるのです。言いたいことを言い、嫌な思いをさせただけで終わるとどうなるか。当然、相手の心は傷つきます。あるいは、こちらに不足したり腹を立てたりして、反発してくる人もいるでしょう。いくらおたすけのつもりでも、こうしたことを繰り返すうちに、お互い心に傷を負い、運命はどんどん落ちていってしまいます。

この道は「通り返し」と聞かせていただきます。自分の言葉によって、相手が怒ったり落ち込んだりしたら、なぜ厳しいことを言ったのかその理由をきちんと伝えてフォローする。そうすれば、相手の心は治まり、しこりも残りません。言葉一つにも細心の注意を払い、慎重に選んで、声をかけたいものです。

反対に、自分が人から嫌なことを言われたときは、それに反応せず、サッとかわすことです。まともに受けたら、こちらも傷を負いますし、相手の運命も落ちていきます。何か返事をするにしても、「はあ、そうですか」くらいに留めて、さらっと受け流す。それが、たすけ心をもった受けとめ方と言えます。

さらに上手な方法は、わざと一度、やられてあげることです。神妙に話を聞いて、相手が言いたいことをひとしきり言った後、タイミングを見計らって、「かしもの・かりもの」や「八つのほこり」などの教理を説き、「体の使い方、言葉の使い方を間違えてはいけませんよ」と諄々と諭していくのです。

私たちは日々、いろいろな人と関わり合いながら生きています。どんな人との関係も、接し方一つで良くも悪くもなる。つまり、その対応一つでおたすけができるということです。

教祖の教えは、非常に奥深いものです。知識として頭に入れておくだけでなく、日々の生活や人との関わりのなかで、どのように生かしていくか考えて、実践に努めていただきたいと思います。

〝みちのとも〟から一寸いい話
たすけ一条の道、つとめとさづけ

上田好美　京伯分教会長夫人・48歳

私の実家は、もともと仏教を信仰していました。家には仏壇があり、幼少から、ご先祖さまを大切にすることや地獄・極楽の話など、仏教の教えを聞いて育ちました。

中学生のころ、あるよふぼくから母

ににをいが掛かり、私も母の勧めで、その方の家へ行くようになりました。私がおつとめのちゃんぽんを教わったとき、その方がとても喜んでくれたことに、正直、驚きました。というのも、当時私が通っていた仏教系の女子高には、「おつとめ」と呼ばれる、お経を読む時間があったのですが、おつとめで人に喜んでもらった経験がなかったのです。その後、だんだんとお道の話を聞くうちに、教祖が世界中の人間をたすけるために教えてくださった、おつとめの大切さを知り、あのとき喜んでもらえた理由が初めて分かりました。

その後、縁あって教会に嫁いで22年になります。

昨年9月、大教会で行われた女鳴物の講習会で、講師から胡弓の弾き方の癖を指摘されたのですが、なかなか修正できずにいました。それでも「稽古出来てなければ、道具の前に座って、心で弾け。その心を受け取る」（『稿本天理教教祖伝逸話篇』五四「心で弾け」）とのお言葉を思いながら練習に励むうちに、だんだん手になじんで弾けるようになり、大教会の秋季大祭では、皆さまと共に一手一つに溶け合って、陽気に勇んで弾くことができたと思います。

また、昨年の夏、喉に痛みがあるというご婦人におさづけを取り次がせていただきました。1カ月後にお会いしたとき、その方から「今度は心臓に取り次いでほしい」とお願いされました。聞けば、前月のおさづけで喉の痛みが治まったとのこと。鮮やかな、こうのうの理をお見せいただいたことに、ご存命の教祖の温もりを感じ、勇ませていただきました。

お道には、たすけ一条の道として、つとめとさづけがあります。おつとめで真剣に人さまのたすかりを願い、自らの心の掃除を怠らず、ひのきしんに励み、一人でも多くの方におさづけを取り次いで、真実のこもったおたすけをさせていただく。その実践が、教祖にお喜びいただける、ひながたの道の歩みだと信じています。

教区だより

○災害救援ひのきしん隊基金の募金について

教区管内からお届けいただいた募金は、第2回回収までに33万8千53円となり、同基金へ振り込ませていただきました。6月末の第1回回収と合わせると合計75万8千660円となりました。ご協力くださった皆様に厚くお礼申し上げます。同基金は今後も継続させていただきますので、どうぞよろしくお願い致します。

○少年会「わかぎの集い」のご案内

日　時　3月1日（土）　15時集合
　　3月2日（日）　16時解散
場　所　中野大教会からスキー場へ
内　容　ひのきしん、オリエンテーション　スキー

お節会 1月5～7日
熱々のすまし雑煮に舌鼓

親里の伝統行事である本部「お節会」は、1月5日から7日にかけて行われた。

教祖が現身をもってお働きくだされていた時代から続く〝新春の風物詩〟である「お節会」。各地の教会による団参や家族連れのおぢば帰りが相次ぎ、3日間で4万5千8人が帰参した。

晴天となった初日。午前9時すぎ、お節会会場の受付には、本部神殿で初参拝を済ませた帰参者が続々と並び始める。一方、餅焼き場では、前日の「鏡開き」で切り分けられたお下がりの餅が丁寧に焼かれていく。

10時、開場の合図である拍子木の音が響き渡ると、帰参者は屋内外に設けられた4カ所の会場へ。焼き餅と水菜の入ったお椀が一人ひとりに配膳されると、ポットから出汁が注がれ、熱々のすまし雑煮が完成。帰参者は素朴なすまし雑煮に舌鼓を打ち、親里ならではの〝新春の団欒〟を味わった。また、会場出口では、袋入りのお下がりの切り餅が配られた。

なお期間中は、本部在籍者や直属教会長、教区長、勤務者、修養科生、管内学校の学生・生徒ら約5千人が、会場の内外でひのきしんに当たった。

2月支部にをいがけデー

2月28日午前9時より
拠点教会　長里分教会 信楽町長野869番地